Osaka University Knowledge Archive

Title	朱有燉の「恋愛劇」の教化意味 : 戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに
Author(s)	温, 彬
Citation	フィロカリア. 2024, 41, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95653
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

朱有燉の「恋愛劇」の教化意味

―戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに―

温　彬

まえがき
第一節　朱有燉の描かれた「淫婦」像とその性格
第二節　朱有燉の描かれた「節婦」像とその性格
第三節　朱有燉「恋愛劇」の教化意味の再解読
結論と余説

まえがき

朱有燉は明代前期の代表的な劇作家の一人である。筆者は、以前の研究で、朱有燉の演劇教化観の問題意識は、物欲の遮蔽から人の先天の徳性を解放しようという点にあり、そして演劇が教化機能を果たせるのは、人に道徳知識と道徳感動を与えられるためであるという結論に達した[1]。しかし、道徳知識であれ、道徳感動であれ、これらは何れも舞台上での具体的な人物を通して表れなければならない。そこで、朱有燉は如何なる道徳知識や道徳感動を観客に伝えようとするのかという点を明らかにするために、本論文では、彼が書いた作品における人物像を分析していく。

朱有燉の現存する三十一部の作品は大体、太平の世を謳える「慶賀劇」と貞節を宣揚する「恋愛劇」、および仏教や道教を内容とする「度世劇」と任侠を描く「英雄劇」という四つの類に分けられている。道徳教化について言えば、彼の書かれた「恋愛劇」は二十世紀初期から先行研究に注目されている。二十世紀中期から、先行研究は朱有燉の恋愛劇に対して、階級論の立場に立脚し、一方的に批判的な態度を抱えていた[2]。本世紀冒頭から、研究者たちは、朱の恋愛劇が男女の愛や、遊女たちに対する同情という、積極的な面を有していることを指摘しているが、その教化の意味は「女子が夫のために貞節を守る」ことを励ますことにあるという考えは昔と変わらなかった[3]。つまり、朱有燉の恋愛劇の教化意味は「封建貴族出身の朱有燉は統治階級の立場で、女性に貞節を守るという封建倫理の桎梏を加える」ことにある、という階級論的な考えは今までの先行研究

の共通認識である。確かに先行研究に指摘されたように、朱有燉の恋愛劇は客観的に、女性に何らかの悪い影響を及ぼす可能性が存在している。[4] しかしながら、研究の面から言うと、唯一の視点である階級論は一種の先入観として、朱有燉の恋愛劇に対する解読の片面化を招致し、その教化意味を全面的に捉えることができない恐れがある。例えば、もし彼の恋愛劇の教化意味は「女子が夫のために貞節を守る」ことにあると簡単に結論付ければ、朱有燉はなぜ『団円夢』と『香囊怨』という二つの作品に、銭鎖児と周恭のような「妻のために貞節を守る」男性像も描くのかという問題が解釈できなくなる。そこで、朱有燉の恋愛劇は先行研究の認識より、一層複雑的な教化意味を有していることが考えなければならない。彼の恋愛劇の教化意味を全面的に捉えるために、今までの階級論の枠からはみ出して、新しい視点を見つけなければならない。

また一方、筆者は、朱有燉に描かれた節婦たちの貞節は、往々にして物欲の誘惑に抵抗することによって表現されているという、先行研究にほぼ論じられていない点に気付いた。[5] そこで、朱有燉はなぜこのように節婦を描くだろうかという問題が浮かび上がってきた。これを解明するのは、彼の描かれた節婦像の性格、および恋愛劇の教化意味を捉え直すことに資する。それに加えて、朱有燉の書かれた『曲江池』と『香囊怨』という二つの恋愛劇作品の序において、「人間の本性は善であるが、物欲がこの本性を蔽ったために悪行が生まれた」というような話が繰り返し出ている。本論の第三節にも論じたように、我々この言葉から、儒学、とりわけ朱子学の理欲観（天理と人欲の関係性に関する考え）の深い影響が見える。そこで、儒家の理欲観は、彼に描かれた節婦像、および恋愛劇の教化意味を理解する重要な視点であると考えなければならない。

以上の説明を踏まえて、本論文は儒学（特に朱子学）の理欲観を視点として、朱有燉の恋愛劇作品における節婦像の性格と、これらの作品の教化意味を捉え直し、後者が有している儒家工夫論的な意味を指摘することを目的とする。本研究を通して、我々は朱有燉恋愛劇の教化意味が一層深く認識出来ると思われる。

第一節　朱有燉の描かれた「淫婦」像とその性格

ひとまず本節で、朱有燉の『宣平巷劉金児復落娼』（宣德八年作）『新編甄月娥春風慶朔堂』（永楽四年作）という二つの作品に描かれた、劉金児と洪葉児という二人の「不貞の女」、即ち淫婦の人物像をめぐって考察を行い、彼女たちはなぜ淫行をしたかという点を解明し、朱有燉の描かれた淫婦像の特質を把握する。これらの淫婦像との対照を通して、我々は朱有燉の節婦像の特徴をさらに確実に把握することができる。

まず『宣平巷劉金児復落娼』（次は復落娼と称す）のあらすじを紹介する。教坊の遊女である劉金児は元々楽人の楚五の妻であったが、彼女はいつも貧乏な楚五を軽蔑している。彼女は商人の高兼と知り合った後、すぐに楚五と離れ、高兼と駆け落ちした。このために、楚

五は官庁に告訴した。高兼はそこで劉金児を見捨てて逃げた。この時、劉金児はもう一人の商人の徐福一と知り合って結婚し、徐の故郷の江西に帰った。しかし、結婚後の劉金児は家事をしたくない。彼女は徐福一と離婚するために、官庁に徐は彼女を強姦してから江西まで誘拐したと、徐を誣告し、徐を入獄させた。その後、地方官は事件の真実を究明し、徐福一を釈放し、劉金児を教坊に戻らせた。

劉金児がどのような淫行をしたかに関して、劇末における色長の判詞における「古い人を送り新しい人を迎えることと、多く利を貪ることで生きる」[6]という言葉によれば、彼女の淫行は「古い人を送り新しい人を迎える」こと、即ち先述べたあらすじのように、最初が楚五の妻であったが、その後は高兼と駆け落ちして結婚し、最後は徐福一と結婚するという、三回の結婚のことである。

ならば、彼女の絶えず再婚の原因はどこにあるだろうか。これは客観的な原因と主観的な心理動機という二点に分けられると考えられる。まず客観的な原因に関して、これは先にあらすじで述べたように、楚五を捨て高兼と結婚するのは、楚五はお金がないことは原因である。そして、高兼から徐福一のところに行ったのは、駆け落ちの件が露見したため、裁判沙汰にならないように高兼に捨てられたためである。最後に徐福一から離れるのは、遊女生活に慣れていたために、家事をやらなければならない人妻生活に適応できないのである。

続いて、劉金児の主観的な心理動機を見ていく。まず、高兼と駆け落ちの理由について、彼女は自分の妹に[7]、

> 妹よ、姉の私は今娼家のお手伝いさん（楚五）と一緒に暮らして、貧乏だよ。最近はこっそりとこの医人（高兼）と付き合って、彼は**とてもお金持ちなんだ**。だから彼と結婚しようと考えている。

と述べている。彼女が徐福一と結婚する理由も同じである[8]、

> 今日の祭りで、一群の江西からの商人がいて、**とてもお金持ちだったよ**。中には徐福一という人がいて、私の家にお茶飲みに来るつもりだ。この人裏でも外でも優秀だし、もう高客（高兼）は二度と来ないから、いっそこの徐福一と一緒に江西に帰ろうかな。

つまり、心理動機的な面から言うと、彼女が高兼と徐福一と結婚しようとするのは、その二人が「とてもお金持ち」のためである。これのみならず、楚五の所に戻り、近所に「もう送故迎新のことをやめなさい」と勧められた後、彼女は自分が相変わらずこうするつもりだと言っている[9]、

> 私は**堪えない**、一生**でも堪えない**。人に笑われても、見下ろ

されても、私の口巧に頼って、**布**（お金）**を騙し取る**のは簡単だろう。

つまり、彼女が「送故迎新」という不貞の行為、或いは淫行を続けようとするのは、お金の誘惑に堪えないためである。

以上を踏まえ、劉金児の不貞の行為の発生する原因は、客観的な原因（例えば高兼の見捨てと人妻生活の慣れないこと）と、主観的な心理動機、則ちお金への欲望という二点がある。ただし、冒頭に述べた色長の判詞によれば、朱有燉は後者こそは主因だと考えていることが伺える。

朱有燉が永楽四年（一四〇六年）に書いた『新編甄月娥春風慶朔堂』（次は慶朔堂と称する）における洪葉児も、劉金児と同じく「不貞の女」である。

主人公の范仲淹は地方官として饒州に着任しに来た。友人の柳子安は妓を招き、彼を慶朔堂で接待する。宴席の間、酔っぱらった范仲淹は妓の甄月娥とお互いに気に入り、婚約をした。目を覚ました范仲淹はこれを後悔し、部下の魏介之に甄月娥をお金で釣込ませる。魏介之はお金を出して甄月娥を誘惑しようとするが、彼女に断られ、殴られかける。范は甄月娥の貞操に感動し、付き合い始めた。二年後、范仲淹は潤州に転任する前に、そこで落ち着いたらすぐに甄月娥を迎えて結婚すると約束した。甄月娥はこのために接客を断り、貧乏を耐えながら范仲淹の手紙を待っていた。半年後、范は魏介之を通して手紙を送って、甄月娥を潤州に迎えて結婚した。

洪葉児は甄月娥の友人であり、彼女と共に妓である。先述した劉金児と同じように、洪葉児の不貞も「送故迎新」にある。ただし、劉金児の複数回にわたる再婚と異なり、彼女は同時に二人の男と親密な関係を持っている。彼女は柳子安の恋人でありながら、柳子安のいない時にはよく魏介之とこっそりと関係を持った。彼女はなぜこのようにするのだろうか。ひとまず彼女が魏介之と関係を持とうとする原因を見ていく、[10]

甄月娥はほんとにお金稼ぐのは下手だね。魏さんは炭石のような大きな金を彼女に渡したのに断った。彼女は、見識が狭いね。**この金、私はきっともらってやる**。

あらすじに述べたように、魏介之は金で甄月娥を釣込むつもりであるが、彼女に断られた。しかし、洪葉児はこの金を手に入れようと考えている。つまり、彼女が魏介之と親密な関係を持つのは、お金のためである。従って、彼女と魏介之との密会が主人公の甄月娥に発覚した後、彼女は次のように釈明している、[11]

姉さんはお金を稼ぐことが下手ですね。諺が言うように、男は南から来た雁の如く、千匹が離れたらまた萬匹が来る。彼（柳子安）が離れたので、私が彼を待つ間に、他人と付き合っても

構わないでしょう。

彼女によれば、甄月娥が範仲淹のために貞節を守るのは、「お金を稼ぐことに下手」なことの表れである。逆に言うと、彼女は同時に柳子安と魏介之と親密な関係を持つのは、お金を稼ぐことに上手なことの表れである。つまり、劉金児と同じように、彼女の不貞の行為の心理動機もお金への欲望にある。

以上の劉金児と洪葉児の人物像に対する分析を踏まえ、朱有燉によって描かれた淫婦たちが、不貞の行為をするのは、お金への欲のためであると言える。つまり、朱有燉の描かれた淫婦たちは、物欲に打ち勝てないことがその重要な特徴である。

第二節　朱有燉の描かれた「節婦」像とその性格

朱有燉の描かれた淫婦像の特徴が明らかになった上で、本節では、朱有燉の『新編劉盼春守志香囊怨』（次は香囊怨と称する）と『新編趙貞姫身後団円夢』（次は団円夢と称する）という二部の作品を取り上げ、彼の描いた節婦像の特徴を明らかにする。

まずは『香囊怨』のあらすじを紹介する。チンピラの胡子滾は豪商の陸源と書生の周恭を連れて遊郭に遊びに来た。陸源は巨資で妓女の劉盼春の初夜を買おうとするが、彼女に断られた。次の日、周恭はまた遊びに来て、劉盼春とお互いに気に入って結婚した。しかし、胡子滾はこれを周の父に伝え、周は父に禁足させられた。劉盼春は周と結婚したため、接客をやめたが、陸源は周が禁足させられている間に、またお金を持って劉盼春を買いに来た。陸源と母（劉の母）の脅迫で、劉盼春は最終に自殺する。

あらすじにあるように、豪商の陸源は二回お金を出して、劉盼春を買おうとしている。初めて劉盼春と会った時、彼は銀の五十両と一対の金釵で、劉盼春の初夜を買うつもりであるが、劉盼春は[12]、

【酔扶帰】あなたは勧誘をやめなさい！私は恥知らずにただ金を求める妓女と違い、次から次へと接客をしない云々。

と、「自分はお金のために送故迎新する淫婦遊女ではない」という理由で、陸源の勧誘を断った。ここで、お金の誘惑に対して、彼女は第一節で取り上げた劉金児や洪葉児などの淫婦と異なる態度を持っていることが見える。

劉盼春は周恭と結婚した後、周恭の父はこの婚姻に反対し、周恭を禁足させられた。陸源はこれに乗じて、さらに百両の銀を出して二度と劉盼春を勧誘する。しかし、彼はもう一度劉盼春に断られた[13]、

私がこの半年間以来「汚れ」されていないなのに、再婚することは絶対にしない。私の言っている言葉は全く私意がない。

劉金児がお金のために自分の夫を裏切ったことと異なり、劉盼春は

お金の誘惑に対して、心が全く動揺していないために、周恭との夫婦の理が保全し、節婦になった。これを踏まえると、朱有燉の描かれた劉盼春の貞節と劉金児の不貞に関して、その分界線はお金への態度であると言える。

ここでまた周恭の表現も留意したい[14]、

〔旦云〕周恭、あなたの妻は珍しいぞ。楽人なのに、そこまで貞節を守る。あなたは彼女の恩義を忘れないで。〔末云〕小生は永遠に大姐（劉盼春）の恩義を忘れません。小生はもう終身他人と結婚しないと誓いました。

劉盼春が自殺した後、周恭は生涯結婚しないと誓った。つまり、劉盼春のみならず、周恭も「貞節」を守ろうとしている。これに関しては次の節で詳しく説明する。

劉盼春と同じように、『団円夢』における女性主人公の趙官保の貞節も、お金の誘惑に対する拒絶によって現れるものである。銭鎖児と趙官保は親が指腹婚を約束した。二人は成人した後、結婚の直前、仲人はお金持ちの丑舎を趙官保に紹介しようとしたが、彼女に断られた。趙と銭は結婚した後、銭は入隊し、趙は一人で銭の親に奉仕する。この時、仲人はもう一度訪ね、丑舎を薦めるが、また趙官保に断られた。丑舎は諦めず、寒食の時に自ら趙官保を勧誘に来たが、彼女に殴られた。この時、銭鎖児は屯所で病気を掛かり、地元の人は自分の娘を銭の嫁にしようとしたが、銭は固く断った。このために、面倒を見る人がいなくなった銭は病死した。銭は死んだ後。丑舎はもう一度仲人に託して、趙官保を勧誘しにきた。未亡人になった趙官保はこれ以上丑舎と母の脅迫を反抗できないために自殺した。神の東岳大帝がこの件を聞いて、銭鎖児と趙官保をそれぞれを「義仙」と「貞仙」として仙班に列席させた。

趙官保は銭鎖児と結婚した後、銭鎖児が外地に兵役を服しに行った。仲人の王婆はお金持ちの丑舎に託され、趙官保に縁談に行ったが、彼女に断られた[15]、

（媒は王婆、旦は趙官保）云々、〔媒云〕姉さん、一言あなたに勧めていいのか。〔旦云〕王婆さん、言ってください。〔媒云〕あなた今こんなに貧乏だから、なぜ衣装とご飯を得る処や地位高い人を選ばないのか。この町にお金持ち少なくないよ、再婚しても構わないだろう。〔旦云〕この王婆、何を言っているか。〔旦唱〕私貧乏でも文句はない。彼たちはお金持ちでも、私が興味ない。〔媒云〕丑舎という人がいて、美男子だぞ。〔旦唱〕美男子でも私の心は動揺できない。〔媒云〕彼は金で作った釵があって、綿羊の肉を食べて、又十数箱の綺麗な服を持っている。あなたはこの婚姻を見逃しないように。〔旦唱〕金で作った釵でも、綿羊の肉でも、十数箱の綺麗な服を持っても、【鵲踏枝】私（このような富裕な生活）に似合わなくて、心は少しでも動揺し

ていない。あなたはどう言っても、私は正し理を無くすのは嫌いだ。〔媒云〕あの爿舎は官員の家族だから、あなたは彼と結婚すれば、後には夫人（地位高い女性）になるぞ。〔旦唱〕私は夫人になる運がないから、ただ家で姑を奉仕したい。

王婆は趙官保の貧乏な現状に対し、「寧ろお金持ちで、地位の高い爿舎と再婚しよう」と勧めている。しかし趙官保は、爿舎はいくらお金持ちでも、地位高くても、彼女の心は動かないと答え、王婆の勧誘を断った。それでも爿舎は諦めなく、寒食節に趙官保の墓参りをきっかけに、自ら彼女を勧誘しに来た[16]、

（浄は爿舎、旦は趙官保）〔浄云〕僕の苗字は爿と言います。爿舎は即ち僕です。〔旦云〕なるほど、また彼奴か云々、〔浄云〕僕の家には沢山の衣装がありまして、美味しい物がありまして、僕の家はとてもお金持ちですよ。〔旦唱〕私はあなたの持っている衣装に興味なくて、あなたの美味しい物が欲しくなく、あなたの家のお金持ちにも愛しない。

爿舎は自ら趙官保を勧誘したが、彼女は変わらずに断られた。趙官保は劉盼春と同じように、お金の誘惑から夫婦の理、あるいは自分の貞節を保全した。

また趙官保の夫の銭鎖児の表現に留意していく[17]、

（末は銭鎖児）〔末抱病上、云〕口北に操練しに来てから、知らずに二年半を過ごした。今病気が厳しくて、何太公のおかけで、見舞いくれて、壻にならせたい。私は自分の妻を忘れて、ここで再婚することはしない。餓死でも病死でも、その恩義を忘れない。私の妻はいくらでも幼い頃に父母の指定なので、不仁義の人になるわけがないだろう。

銭鎖児は病気のため、何太公の家で療養中になった。何太公は彼に自分の娘と結婚して欲しいが、彼は自分が既に妻がいるので、ここで再婚するのは不仁義だという理由で断った。つまり、劉盼春、趙官保など夫のために貞節を守る節婦像のみならず、朱有燉はさらに周恭、銭鎖児のような妻のために貞節を守る義夫像も塑造している。これはつまり、朱有燉の考えで、貞節を守るのは女性に対する一方的な要求であるのみならず、夫婦両方とも貞節を守り、夫婦の理を守る義務を有していることを示唆しているのではないかと考えられる。

以上を踏まえ、朱有燉は「夫婦の理を守る」、則ち貞節と「物欲の誘惑に打ち勝つ」ことという両者の間に、一種の直接的な関連を付けようとすることが見られる。則ち節婦たちが貞節を守れるのは、物欲を打ち勝ったためである。逆に言えば、女性には物欲を打ち勝てば、貞節を守り、節婦になることができるようになる（男性も同じ）。勿論、現実における恋愛や夫婦関係は複雑で、貞節あるいは夫婦の

理を守れるかどうかは、物欲に対する態度だけで決まるのではない。ただし朱有燉の所で、この両者は「これでなければあれだ」というような対立関係になされている。第一節で述べた劉金児は楚五との夫婦の理を失い、不貞な淫婦になるのは、高兼のお金の誘惑に負けたためである。また一方、劉盼春と趙官保はお金の誘惑に打ち勝ったからこそ、夫婦の理を保全し、節婦になった。勿論、朱有燉は夫婦の感情という要素を完全に無視したのではなく、彼は周恭と劉盼春の愛、および趙官保の入隊した銭鎖児に対する思慕も描いている。しかしこれと比べると、彼はやはり更に多くの筆舌を、盼春と官保のお金持ちに対する拒絶に尽くしている。故に、感情的要素より、彼はむしろこの二人の金に惹かれない品性に対する描写をさらに重視していると考えられる。このために、筆者は、物欲に心を動かさないことこそ、朱有燉の描かれた節婦像の最も重要な特徴であると考えられる。

第三節　朱有燉「恋愛劇」の教化意味の再解読

さて、なぜ朱有燉はこのように節婦を描くだろうか。本節ではこの問題を明らかにし、恋愛劇の教化意味を捉え直すことを試みたい。

これに関して、まず『香囊怨』の序における、次の段を見ていく、[18]

三綱五常の理は、世間には絶滅していなかった。**唯人は物欲に覆われて**、天理に悖るようになって、此道を守れないようになった。

本論文では取り上げられなかったが、同じく恋愛劇に属する『新編李亜仙花酒曲江池』の序にも同じ旨をさらに詳しく説明している、[19]

彼女は妾婦者だが、天理人心という泯からずものも有している。人の性は元々善だが、習によって遠くなり、善悪高下の区別も初めてあったのは、**物欲がこれを蔽ったからだ**。

つまり朱有燉によれば、人間の本性は善である。そして、すべての善行もこの善なる本性から発したものである。逆にいえば、人間が様々な悪行を行ったのは、その本性が物欲に蔽われたためである。そこで、もし人が「善」を成就しようとすれば、まず自分の本性に立ち戻らなければならない。ただし、自分の本性に立ち戻るには、まず物欲の障りを解消しなければならない。

朱有燉のこのような考えの中には、朱子をはじめとする宋時代（九六〇年―一二七九年）儒学、特にその「理欲観」の影響が見られる。理欲観というのは宋の儒学者たちの、「天理」と「人欲」という二つの範疇の関係性に関する考えである。程頤や朱子の所で、この両者は完全に、対抗的な関係になされている。これに関して、朱子は次のように述べている、[20]

明徳について聞く。（朱子が）曰く、これは即ち天に賦与された性というものだ。人皆はこの明徳を有している。**ただ物欲の昏蔽のために**、暗塞になった。

明徳、或いは「性」は即ち人の善なる本性である。朱子によれば、人欲はこの本性を遮蔽する恐れがある。このために、本性を保全するには、まず人の物欲を退治しなければならない。朱子と同じように、朱有燉も天理と人欲との対抗的な関係を強調している、

人の性は、天に命じられるものだから、すべてが善だ。日用常行のすべてが至善の道に他ならない。これは私の本来の徳だ。外務は一旦侵入して、不善が生じる。ひとつの不善が生じれば、これは一匹蠅の穢れの如く。二つの不善が生じれば、二匹の蠅の穢れの如く。**不善は日々に生じれば、その善は日々に消える**。善は日々消せば、私の本有の徳は、私の美にはなれないようになる。[21]

「外務は一旦侵入して、不善が生じる」とは、心が外界に奪われて振り回されることで、不善なる物欲が生じることである。また太文字の部分から見れば、朱有燉が、物欲の不善は、人の本性の「善」と「両立できない関係性」を呈していると考えている。このために、彼は道徳と欲望との関係性に関して、完全に朱子の理欲観を受けていることが見える。

本節の冒頭で引用された、二つの恋愛劇の序から見ると、朱有燉は意識的に、女性の守節行為を善なる本性と物欲との対抗関係、則ち朱子学の理欲観の枠組みの中で捉えている。従って第二節で論じたように、彼の描かれた節婦の貞節が、物欲の誘惑に対する拒絶によって表れている。このために、これらの節婦像は、儒家の理欲観を基づいて描かれ、これを体現するものだといえる。そこで、朱有燉の描かれた節婦たちはもはや、単なる夫のために貞節を守る模範女性像ではなく、これらの一々の人物像には、一つの更に普遍的な問いが横たわっている。これは即ち、「人間は如何に物欲の障りを破って先天の徳性に立ち戻るか」というのである。これに対して、朱有燉は第一節で言及した『慶朔堂』で「情欲はこのように人（の心）を動揺させる故に、（心は）ただ謹んでこれを防ぐべきだ」と答えている。[22] つまり人の意識はいつでも謹んで警戒的な状態を保持すれば、欲の蝕みを防ぐことができる。そこで、彼の描いた節婦像の教化の意味は「夫のために貞節を守る」ことを宣揚するのみに留まるのではなく、彼はさらに、これらの具体的な節婦像を通して天理と人欲の対抗関係を示し、「人間は謹んでいる心で物欲の誘惑を防ぐべきだ」という旨を観客に伝えることを求めている。

実際に、朱有燉が周恭や銭鎖児など義夫像を描いた動機も、この意味上で理解できる。周恭は劉盼春の恩義を忘れずに一生独身で通すというのは、即ち未来に出る可能性がある誘惑に抵抗しつつ、劉

盼春との夫婦の理を守るのである。[23] 銭鎖児の殉節は儒家の「舎生取義」に近いが、これも公的な理と私的な欲との対抗関係の体現である。[24] 彼はこれらの義夫像を描くのは、「謹んで防ぐべき」という教えは男女問わず、全ての人がこれを従うべきものだということを強調したいのである。

既にまえがきで言及しているように、今までの先行研究は往々にして、朱有燉の恋愛劇の教化意味を「女子が夫のために貞節を守ることを励ます」ことにあると簡単に見做している。しかし、以上の考察を踏まえて、筆者は朱有燉の恋愛劇には二重の教化の意味を有していると考えられる。これがまずは貞操という夫婦倫理を宣揚することであり、つぎは観客の物欲に対する警戒心（謹んで防ぐべき）を喚起することである。そして、第小節で既に論じられたように、朱有燉の作品において、諸家にはほぼ論じられていない後者こそ前者を成り立たせる前提である。

さて、我々は如何に朱有燉の「謹んで防ぐべきだ」という言葉を理解するのだろうか。現代に生きている我々にとって、これはただのありふれた話のような道徳訓戒であろう。しかし注意しなければならないのは、朱子学の文脈において、これはさらに深い意味を有している。先に述べたように、朱子は、固有の徳性、或いは天理に立ち戻るには、まず自身の物欲を退治しなければならないと考えている。その具体的な方法として、彼は「窮理」と「主敬」という二つの工夫（修養方法）を提示している。後者（主敬）に関して、宋時代の儒学者に、はじめてこれを強調するのは程頤（一〇三三―一一〇七）である。彼の考えでは、敬は「主一無適」、即ち意識が放逸せずに集中するという意味である。その後、敬の意味は彼の弟子たちによって広げられ、また「常惺惺（心が常に覚醒）」（謝良佐）、「其心収斂不容一物（心は外部に惹かれずに収斂状態に保つ）」（尹焞）などの意味も加えられるようになった。朱子はこれらの思想を受け継ぎ、主敬を窮理のほかに、最も重要な工夫と見做している。ここで注目したいのは、朱子が「戒慎恐懼」という意味で主敬を論じているのである、[25]

> 曾子に曰く、「戦々兢々、如臨深淵、如履薄氷」、これは即ち敬の方法だ。この心を保たないと、人は常に昏昧に堕ちているようになる。（例えば）今な誰かは寝ている中、身には痛みや痒みがあったらすぐ起きる。そもそも、心はずっと動いているなら、自然に保てる。『中庸』における「戒謹恐懼」、これも敬という意味だ。

つまり、意識の緊張感（「戦々兢々」「戒謹恐懼」）を保つことを通して、心を昏睡に堕ちずに、常に覚醒する状態になることができる。これは即ち主敬の方法である。

そうであれば、心の覚醒と昏睡は如何なる意味だろうか。朱子の考えでは、人間は「性」と「気」という二つの面によって構成され

ている。性は即ち本論で言う人間の善なる本来性であり、人間が人間になる本質でもある。これに対して、気は人間の肉体を含む万物の形体を構成する質料である。彼によれば、人間の道徳意識は性によって発するものである。そして、人間の欲張りは気を源とする。人間のこの二元的な構造によって、一つの心にも「道心」と「人心」という二つの面がある。道心は即ち性から発し、これを体現している心である。人心は気に発し、欲を求める心である。この両者は一つの心に属するが、両者の間には一種の緊張感が存在している。もし人心は心を主宰し、道心を圧制すれば、これは即ち朱子のいう心の「昏昧」状態であり。従って人間は欲張りになる。逆にいえば、もし道心を心の主宰として確立し、人心を規制すれば、これは即ち心の覚醒状態である。そして、主敬工夫の効果は、道心を呼び起こし、心を覚醒させ、これで物欲の蝕みを防ぐという点にある。そして、朱子が言っている「戒慎恐懼」という主敬の内容、を朱有燉の「謹んで防ぐ」という言葉は同じく、意識上の謹む状態を意味している。朱有燉の朱子学背景に鑑みて、彼が言っている「謹んで防ぐ」という言葉は、則ち朱子の主敬工夫である可能性が高いと考えなければならない。

以上を踏まえて、朱有燉の描かれた節婦像と義夫像が有している「謹んで防ぐべき」という教化意味は、尋常的な道徳の戒めではなく、これは更に儒家の主敬という工夫論的な意味を示していることが分かった。つまり、節婦、義夫などのこれらの人物像は朱子学における居敬工夫の具現化である。朱有燉が舞台上で、これらの人物を通して、「謹んで防ぐべきだ」という旨を観客に伝えるのは彼の目的である。そしてもし観客が劇を観て、この旨を肝に銘じ、日常生活においても常に謹んでいる心を持って生きれば、これは即ち朱子の居敬工夫を実践している。

ちなみに、ここで朱有燉とほぼ同時期の丘濬という劇作家の観点も留意したい。筆者は前の研究で既に述べたように、朱子学者として、彼は朱有燉と同じく、物欲が先天の徳性を遮蔽することが人の悪行の起源だと考えている。そして、彼は『伍倫全備記』という劇作品の前口上で、次のように述べている[26]、

【鷓鴣天】書会の誰がこの雑劇を作ったのだろうか。南の節でも北の節でも、両方備わっている。ただし、倫理に関わらないと、物語はいくら新しくても意味ないのだ。萬方から人々が楽しんでいるこの太平な時代で、今夜でこの新しい作品を上演して、人の心を常に惕然させることは大事だ。

「人の心を常に惕然させる」というのは、即ち彼が設けたこの作品の教化的目標である。つまり、彼は観客がこの劇を観た後、心をいつでも謹んでいる状態に保つことを求めている。これは朱有燉の言う「謹んで防ぐ」という言葉と同じように、朱子学の居敬工夫である。これを踏まえ、朱子学の工夫論が明時代前期の演劇に与える影

響が広いことが見える。

結論と余説

以上の考察を踏まえ、本論文では次の二点の結論が出た。まず、朱有燉の描かれた節婦像は主に、「物欲に心を動かない」ことをその特徴とする。つぎに、これらの節婦像における教化意味は単なる「夫のために貞節を守る」ことを宣揚するのではなく、これは更に儒家の理欲観、および朱子学の居敬工夫の具現化し、物欲の蝕みを「謹んで防ぐべきだ」と戒めるのである。

また一方、朱有燉の劇作品における人物像の工夫論的意味を指摘するのは、儒学が演劇の人物像の塑造に与える影響を一層深く理解することに資する。これだけではなく、これはまた次の問題を捉え直すことに資する。つまり、当時の演劇観において、教化を受ける観客は如何なる存在だろうかという点である。これに対して、先行研究は往々に、民衆に統治階級の意識形態を降り注ぎ、封建帝政の下の良民や順民にさせ、そこで統治の安定を固めることが目的である。この観点での民衆・観客はもはや圧制され、主体性が抹殺されている不完全な存在になっている。だだし、本論文で述べたように、朱有燉、丘濬などの劇作家たちの目標は、舞台を借りて観客に朱子学の居敬工夫を具体的に展示し、これを実践させることにある。ここで留意しなければならないのは、儒学における工夫というのは、その最終的な目的は天地と合流し、超越的な意味を有している聖賢になるのである。これはつまり、劇の教化を受け、居敬工夫を日常に実践している観客たちは、個別的、限りのある存在を超え、聖賢になる可能性がある。先行研究と比べると、かかる観客はまた積極的な意味上の、無限な潜在力を備わっている「予備聖人」になった。これを踏まえ、筆者は中国演劇論における観客の位置づけの複雑性を指摘するほか、儒家の「成聖（聖人になる）」という文脈の中で、中国演劇論における「観客」の性格を把握する可能性を示したい。

（1）「全徳―朱子学の視点からみた朱有燉の演劇教化観」日本演劇学会全国大会、二〇二三年六月二十三日。

（2）例えば一九五七年に、朱君毅氏と孔家氏は、「表面では男女の恋愛を謳えるものだが、実際には「人喰い」の封建道徳（貞節）を宣揚するものである」と、朱の恋愛劇に強い非難を加えている。朱君毅、孔家「略談朱有燉雑劇的思想性」『光明日報』一九五七年、十二月一日。

（3）趙暁紅「皇室貴族的伝統文化情結―朱有燉雑劇的現代解読―」『東方論壇』二〇〇三年第六期、二九頁。廖奔「論朱有燉」『中国戯曲学院学報』三十六巻第三期、二〇一五年八月、五頁。

（4）廖奔「論朱有燉」『中国戯曲学院学報』三十六巻第三期、二〇一五年八月、五頁。

（5）これに関しては本論文の第二小節で詳しく説明する。

（6）「只靠着迎新送旧、全日凭着巴鍰為生」「巴鍰」は即ち利を貪るという意味である。『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、三二七頁。

（7）「妹子、你姐姐如今守着箇撅丁、十分艱難。近日偸留了這箇医人、十分有銭、你姐姐待嫁了他」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、三一三頁。

（8）「今日賽廟処、有一火江西客人好生有銭、内中有箇姓徐、喚作徐福一、要来姪女児家喫盞茶。此人内才外才、表裏相称、我料着高客敢也不来

了、不如留下這江西客人、搬上他船、跟他江西去了罷」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、三一七頁。

(9) 「我忍不住、一世忍不住、情願着人笑我、小覷我、憑着我那付淨嘴、哪裏不哄的些布使」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、三二五頁。

(10) 「甄家這弟子、這等不会覓錢、魏官人與他火炭般一塊黄金、他不肯接、也則是不見広、這金子少不得是我的」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二六頁。

(11) 「姐姐、你好不会覓錢、過一日是一日的衣飯、常言道「漢子有似南来雁、去了一千有一万」、他每去了幾時、等的他来、俺即顧養漢来不妨」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、三一頁。

(12) 「【醉扶帰】空逗引蜂蝶意、枉約会燕鶯期。我従来做不慣迎新送旧的、又不比浪包婁求食妓」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二三九頁。

(13) 「我已半年来無点涴、怎肯両遍家結婚姻。我説来的言語無私徇云々。」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二四七頁。

(14) 「〔旦云〕周恭、難得你這渾家、雖是楽人、這等守志、你却休忘了恩義也。〔末云〕小生永不肯忘大姐深恩、小生発了誓願、終身再娶妻室了」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二五〇頁。

(15) 「云々、〔媒云〕大姐我有一句話、敢勧你麽。〔旦云〕王婆婆你試説咱。〔媒云〕你如今這般窮呵、何不尋箇着衣飯処、揀箇官員舎人。這城中少甚富的、改嫁一箇也罷。〔旦云〕這王婆児、説的是甚話。〔旦唱〕一任我窮則窮甘心的受苦、你道他富則富我無心恋汝。〔媒云〕有那爿舎十分生得俊美。〔旦唱〕一任他美則美我芳心不渝。〔媒云〕他更有戴的是燒手似金釵、喫的是爽口似綿羊肉、又有十数箱子打眼目的好新衣服、你休誤了這親事。〔旦唱〕便将着燒手般金鳳釵、便有那爽口的綿羊肉、更将着十数箱打眼目的衣服。【鵲踏枝】我其実不相孚、我心無半星無、一任你数黒論黄、我其実悪紫奪朱。〔媒云〕那爿舎是宦官人家舎人、你肯嫁了他、久後便是夫人県君。〔旦唱〕我也無做夫人的分福、只甘心向萱堂奉養尊姑。」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二五九頁。

(16) 「〔淨云〕小子姓爿、爿舎的便是小子。〔旦云〕原来又是那厮云々、〔淨云〕小子也有換套児的衣服、揀口児的食、小子家中十分富貴。〔旦唱〕我也不恋你那換套衣、不図你那揀口食、不愛你那家豪富。」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二六三頁。

(17) 「〔末抱病上、云〕自従来口北操練、不覚過了二年半也。如今染得病重了、多感何太公、早晩照覷、要将他女児招我為壻、我想来、怎肯忘了我渾家、在此別継姻親。便餓死病死了、也不肯忘恩負義。我家中渾家、終是父母配対、綰角夫妻、怎肯做箇不仁不義之徒。」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二六五頁。

(18) 「三綱五常之理、在人世間未嘗泯絶、惟人之物欲交蔽、昧夫天理、故不能咸守此道也」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、二三六頁。

(19) 「予乃嘆其雖為妾婦者、亦皆有天理人心之不可泯焉。人之性本善、因習而相遠、始有善悪高下之分、此物欲蔽之也。」「新編李亜仙花酒曲江池」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、七八頁。

(20) 『朱子語類彙校』、上海古籍出版社、二〇一四年、三三三頁。

(21) 人之性、天所命之、皆善也。日用常行、無非至善之道、此吾本有之徳也。外務一侵、不善長焉。長一不善、是一蠅之穢也。長二不善、是二蠅之穢也。不善日長、其善日消、善日消、是吾本有之徳、亦不能為吾之美也。」「玉簪花説」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、七一〇頁。

(22) 「固知情欲之蕩人如此、唯当謹慎以防間之」『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月、十八頁。ここでは「情欲」だけを説いているが、儒家の思想において、美色に対する欲（情欲）は金などに対する欲と同じく、「物欲」や「人欲」として取り扱われている。儒家は様々な欲に対する退治法を示しているが、情欲や金欲などに対するそれぞれの退治を区別していない。このために、ここでの「謹んで防ぐ」というのは情欲だけではなく、人欲全体の退治法と見做しても良いであろう。

(23) 白婆と周恭は「劉盼春の恩義を忘れず」という言葉に対して詳しく説明していないが、中国文学史に描かれている妻や恋人の恩義を忘れる「薄情者」はほぼ功名と美女を貪り、自分の妻を背く人であるため、ここでの「恩義を忘れず」という言葉この意味上で言うものであると

考えられる。

(24) 朱子学において、生存などの正常な生理欲求は簡単に人欲と見做されていない。しかし、この生理欲求は天理と衝突になる時、絶対的な公なる天理の前で、これは私なる「人欲」に帰すしかない。このために、銭鎖児の殉節も天理と人欲との対抗の結果と見做しても間違っていないであろう。

(25) 「曾子曰く、「戦々兢々、如臨深淵、如履薄氷。」此乃敬之法。此心不存、則常昏矣。今人有昏睡者、遇身有痛痒則蹶然而醒、蓋心所不能已、則自不至於忘。中庸戒謹恐懼、皆敬之意。」『朱子語類彙校』、上海古籍出版社、二〇一四年、九六〇頁。

(26) 「【鷓鴣天】書会誰将雑劇編、南腔北調両皆全。若於倫理無関緊、縦是新奇不足伝。風日好、物華鮮、萬方人楽太平年。今宵搬演新編記。要使人心総惕然。」「新編中国古典戯曲論著集成明代編第一集」『歴代曲話彙編』黄山書社、二〇〇九年、二一〇頁

参考文献

朱君毅、孔家「略談朱有燉雑劇的思想性」『光明日報』一九五七年、十二月一日。

趙暁紅「皇室貴族的伝統文化情結—朱有燉雑劇的現代解読—」『東方論壇』二〇〇三年第六期、二九頁。

廖奔「論朱有燉」『中国戯曲学院学報』三十六巻第三期、二〇一五年八月、五頁。

『朱有燉集』斉魯書社、二〇一四年三月。

『朱子語類彙校』、上海古籍出版社、二〇一四年。

「新編中国古典戯曲論著集成明代編第一集」『歴代曲話彙編』黄山書社、二〇〇九年。